

仲間への攻撃行動に及ぼす結果の予期の影響 —LINE や学校トラブルの予防に向けて—

飯嶋 みはる

近年高校生の中で、コミュニケーションアプリ「LINE」の利用率が高まっており、リクルート進学総研が実施した「高校生価値意識調査 2014」では、全国の「無料通話アプリ」を利用している高校生 730 名のうち 87.5%が LINE を利用していると回答した。一方で、メッセージを確認したにも関わらず返信をしない「既読無視」問題や、グループからターゲットを退出させる「LINE 外し」問題など、LINE における攻撃行動が問題となっており、LINE における攻撃行動を予防・低減するための方法を検討することが課題となっている。また、LINE における攻撃行動は、学校トラブルなどの背景情報が存在した上で発生する場合が考えられる。

そこで本研究では、人間の情報処理課程を理論化した社会的情報処理モデル (Crick & Dodge, 1994; Dodge, 1986) の第 5 段階である「反応決定」ステップのうち「結果予期」に着目し、「攻撃行動を取ることで相手との関係が悪化する」と結果の予期をすることが LINE における攻撃行動の抑制に効果的であるか検討すること (目的 1)、攻撃行動を取る傾向のある人 (関係性攻撃傾向高群、不機嫌・怒り傾向高群、ゆるし傾向低群) がそうでない人に比べ、結果の予期をすることが攻撃行動の抑制に効果的であるか検討すること (目的 2)、結果の予期をすることにより攻撃行動以外の選択に及ぼす影響を検討すること (目的 3)、学校トラブルと LINE トラブルの組み合わせが LINE における攻撃行動に及ぼす影響を検討すること (目的 4) とした。

本研究は関西地方の高校 1、3 年生の生徒 189 名 (男子 54 名、女子 135 名) を対象に、結果の予期の有無と背景情報の有無の 2 要因による質問紙実験を実施した。実験では、参加者に 1 回目の行動を選択させた後、2 回目の行動を選択させる前に結果の予期をさせる条件 (実験群) と結果の予期をさせない条件 (統制群) に分けた。加えて、各群の中で学校トラブルに関するエピソードを教示した条件 (背景情報あり群) と教示しなかった条件 (背景情報なし群) に分けた。以上の 2 要因被験者間計画により、LINE における 3 つの「グループトーク」場面 (「挑発的発言」、「分かりにくい反応」「既読無視」) について、相手の発言・反応に対する行動を提示し、それぞれの行動の取りたさを回答してもらった。

本研究では、主に以下の結果が示された。

- (1) 結果の予期の有無により攻撃行動の抑制に影響は見られなかった。
- (2) 不機嫌・怒り傾向高群において、結果の予期をすることにより攻撃行動が抑制されることが示された。
- (3) 結果の予期をすることにより、「友人・大人に注意してもらおう」など状況次第で事態が悪化する行動を選びやすくなることが示された。
- (4) 背景情報の有無により攻撃行動の選びやすさに影響は見られなかった。

本研究では、提示した場面に対して攻撃行動をもともと選びにくく、攻撃行動に対する結果予期の効果が出にくかったと考えられる。そのため、日常生活に見られるより攻撃行動を選びやすい場面を検討する必要がある。また、どのような行動が状況を悪化させるのかといった、行動選択のリスクに関する教育など、ネット上の攻撃行動に対する支援教育の検討が望まれる。

(指導教員 鈴木佳苗)